

2006年度春学期 アンケート報告

学生による授業評価

中邑 光男

◇実施状況

より質の高い教育を行うためには、直接学生の声を聞き、それを授業に反映させることが必要であるとの認識に立って、その有効な手段である「学生による授業評価」を全学的に実施する。

◇実施期間

2006年6月12日（月）～6月24日（土）

◇対象

- (1) デイタイムコース及びフレックスコースの平成18年度春学期開講の講義科目（教養科目・保健体育科目・専門教育科目）、外国語科目（日本語を含む）及び体育実技科目を対象とする。ただし、複数担任科目（オムニバス・リレー授業）は除く。
- (2) 専任教育職員及び非常勤講師を対象とする。

◇全体の講評

関西大学では、上記の趣旨・目的に沿い、2000年後期より「学生による授業評価」を全学的に実施している。本稿は2006年春学期の「学生による授

業評価」アンケート実施結果について報告するものである。なお本稿では、2006年度春学期のアンケート調査結果を、2005年秋学期の結果ではなく、2005年春学期の結果と比較する。これは、「関西大学FDフォーラム」においてこれまでも指摘されてきたように、春学期と秋学期のデータは多くの点で非常に異なり、この2つを比較することは適当でないと考ええるからである。

1. 実施状況

表1は、2006年度春学期の「学生による授業評価」アンケートの実施状況をまとめたものである。この表と、実施率と回答率の経年変化（春学期のみ）を示した図1を見ながら、2006年春学期の「学生による授業評価」アンケートの実施状況とその変化を調べていこう。

まず、アンケートを実施したクラスの割合を表す「実施率」は、91.9%であった。このことからほとんどの科目でアンケートが実施されていると言えよう。

表1：アンケート実施状況

		講義	外国語	体育実技	全体	
春学期・前期 終講科目	対象	a. 科目(クラス)数	1,636	1,549	169	3,354
		b. 学生数	207,133	49,555	6,331	263,019
	実施	c. 科目(クラス)数	1,408	1,516	158	3,082
		d. 回答者数	79,333	40,892	4,450	124,675
	実施率	c÷a	86.1%	97.9%	93.5%	91.9%
	2005年春学期比		-1.1%	0.4%	-2.8%	0.6%
	回答率	d÷b	38.3%	82.5%	70.3%	47.4%
	2005年春学期比		0.4%	0.6%	-9.6%	0.3%

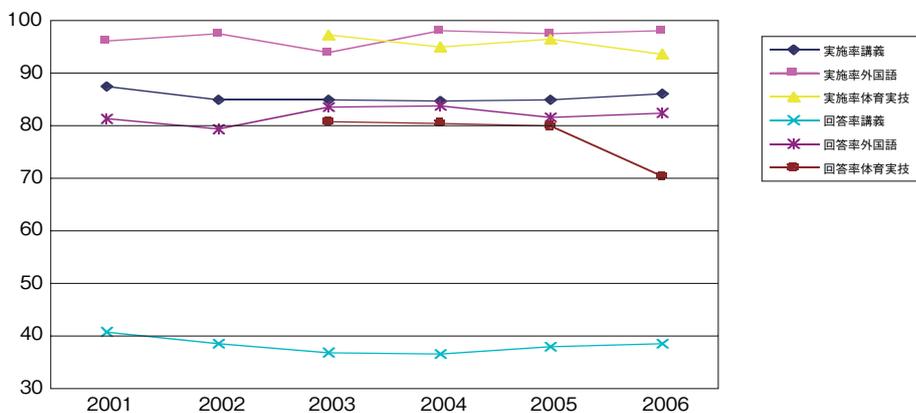


図1：授業評価アンケート実施率・回収率の変化（春学期のみ）

具体的には、「講義」での実施率は86.1%であった。2005年の実施率85.0%からさらに上がっており、高い数字を示している。「外国語科目」の実施率はこれまでも高いが、このアンケートでも97.9%のクラスで実施されており、その傾向を確認することができる。「体育実技」も2005年に比べると実施率が2.8%下がっているものの、依然として、93.5%と高い数字を記録した。

一方、学生の延べ人数によって算出した「回答率」は47.4%であった。この数字は2005年から微増したものの、これまでのアンケートと同様に、協力を得られた学生数が調査該当数の半分にも満たなかったことを示している。

具体的には、「講義」での回答率が、「外国語科目」や「体育実技」での回答率と比べて、際立って低い。図1から分かるように、この傾向は、アンケート開始時から一貫して見られるものであり、「講義」での回

答率が40%を超えたのは2001年春学期だけである。「学生による授業評価」アンケート結果をさらに有用なものにするためには、適切なクラスサイズの検討も含めた、「講義」での回答率を有意義に高める方法を模索すべきだろう。

表2は、アンケートの実施状況を学部・コース別に示したものである。

「実施率」については、総合情報学部を除いて、どの学部も90%を超えており、高いといえよう。2006年の全体の実施率は、工学部と総合情報学部での実施率の上昇もあり、2005年春学期よりも0.6%高い。

「回答率」を見ると、文学部と工学部で50%を超えているものの、他の学部はおおむね40%前半の回答率であった。アンケートの回答率が低いという問題点は、ほぼ全ての学部に共通して見られるといえる。

表2：学部別アンケート実施率・回答率

	テイ法	テイ文	テイ経	テイ商	テイ社	工	総情	フレ全	保健体育	計
実施率	90.4%	93.1%	93.5%	95.1%	92.9%	93.4%	86.2%	87.9%	93.1%	91.9%
2005年春学期比	+2.4%	-0.7%	-2.1%	+0.8%	-2.3%	+4.1%	+2.8%	-1.6%	-3.4%	+0.6%
回答率	41.4%	55.6%	45.9%	43.5%	43.8%	51.6%	44.5%	44.2%	68.0%	47.4%
2005年春学期比	+1.1%	+2.8%	-0.7%	+1.4%	-3.0%	+2.4%	+5.5%	-2.9%	-6.6%	+0.3%

2. 全体的傾向

全学の3,082のクラスについて、のべ263,019人を対象とする「学生による授業評価」アンケート結果を次の手順で分析する。

データの集約は、次の手続きに従った。共通質問項目数は12で、「⑤強くそう思う、④そう思う、③どちらとも言えない、②そう思わない、①全くそう思わない」の5件法で評定する。まず質問ごとにその項目に属する全クラスの個々の評定平均値を、0.5の値の間隔でグループ化し、8つの評価段階に分類する。次にその評価段階に対して、A+ (5.0～4.5)、A (4.5～4.0)、B (4.0～3.5)、C (3.5～3.0)、C- (3.0～2.5)、D (2.5～2.0)、E (2.0～1.5)、E- (1.5～1.0) というラベル付けを行った。なお、境界の値は上の評価段階に入れた。

図2は、質問項目ごとに、クラスの評価平均値の分布(割合)を示したものである。質問項目は、評価平均値の大きさに基づき、評価の高い項目が上の方に、評価の低い項目が下の方に並び替えられている。

図2からアンケート結果を見ていこう。まず「出席(10)」に関する質問の評定平均値が90%を超えるクラスでA以上の評価を得ており、際だって高いことが分かる。この結果とアンケートの回答率が47.4%であっ

たことを考え合わせると、授業に非常によく出席している学生とそうでない学生がおり、アンケートに回答したのは前者のグループの学生であると推測できよう。つまり、延べ人数で過半数の授業にあまり出席していない学生の授業評価は、本アンケート結果には反映されていない。この点は以下の考察全てに関連する重要な点である。

以下、「各項目のクラスごとの評価平均の分布」の詳細を、グラフの上から下に向かって、「要項(1)」から順に見ていこう。なお、適宜、筆者の考察を付け加える。

「要項(1)」の結果は約95%がB以上の評価を与えており、2005年の調査結果と同じく、評価の高い項目となった。これは教員が「シラバス」を提示し、それに従って授業を進めるという授業が安定的に実施されていることを意味するといえる。

「声(3)」についても90%を超えるクラスでB以上の評価であり、2005年春学期の調査結果とほぼ同じ結果を示している。教員の声の大きさが十分であるかどうかは基本的な授業スキルであることを考えれば、われわれ教員はC以下の評価を毎年少しでも減らすことが必要であろう。

「熱意(4)」は、2005年に7位であったものが2006年

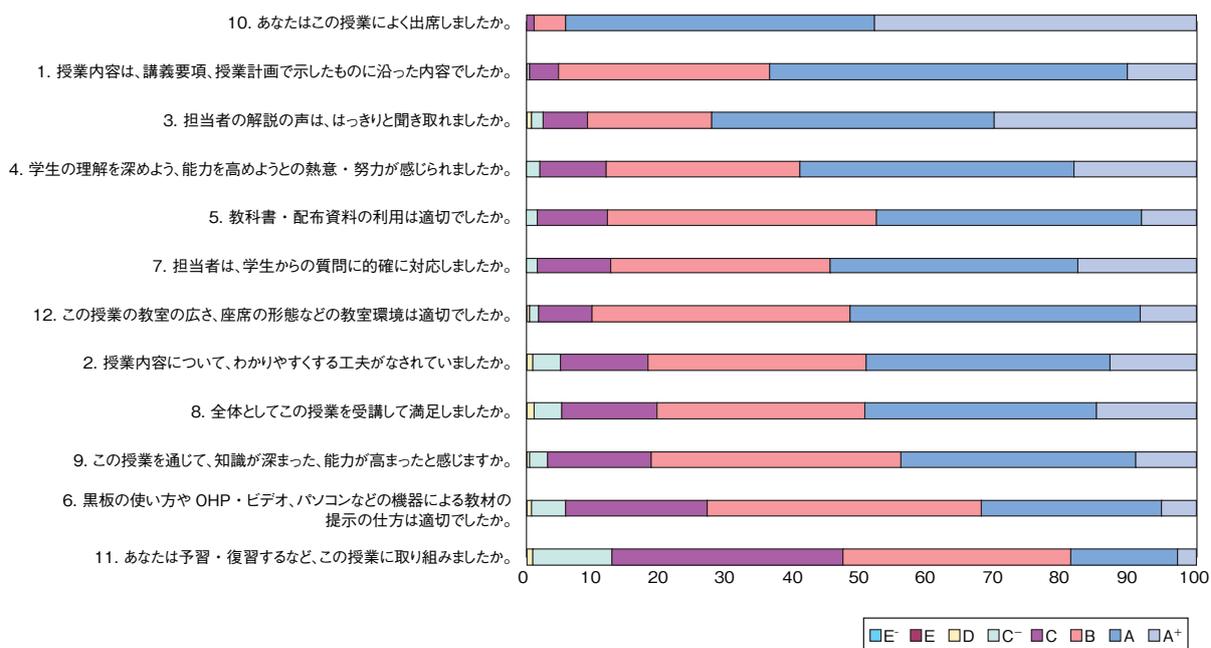


図2：各項目のクラスごとの評価平均の分布

では4位と上昇している。熱意は、教員が表現するだけではアンケート調査には正確には反映されない。学生が授業内容や教員の姿勢に注意を払わなければならず、そのためには、学生と教員との間に一定のラポールが構築されていることが前提となろう。このように考えれば、この項目の順位が上がったことは喜ばしい結果である。

「教科書(5)」については、B以上の評価は高いものの、相対的に、A以上の評価が少なくBの評価が目立って多い。教科書や配付資料は教師による授業の工夫が特徴的に表れるところである。教員が、教科書や配付資料を今後より適切に利用し、Bの評価をA以上の評価に改善することが望まれる。

「質問(7)」の評価平均も2005年とほぼ同じである。この項目と「熱意(4)」と比べると、B以上の評価の割合はほぼ同じだが、A評価が少なくB評価が多いと分かる。教員の熱意を学生が感じるかどうかは、質問をどう取り上げるのかという点も関係するに違いない。「熱意(4)」を「質問(7)」に効果的に反映させたい。

「教室(12)」については約90%のクラスがB以上の評価をしており、教室の広さや座席の形態について適切であると回答している。なお、この項目は各評価点の分布を含めて2005年とほぼ同じ結果を示している。「教室(12)」は物理的な条件が変化しなければ大きな改善は望めないと予想されるが、アンケート結果はそれを裏書きしている。

「工夫(2)」の項目から「知識深化(9)」については、B以上の評価が少なくなり、学生の評価は相対的に厳しいものとなる。しかし2005年と比較すると、3項目

とも改善傾向を示している。

「工夫(2)」については、B以上の評価はわずかであるが2005年よりも上昇している。特にA+の評価が上昇していることが注目される。

「満足(8)」についてはB以上のクラスが80%を超えており、この数字は2005年から3%程度上昇している。

「知識深化(9)」でもB以上のクラスが80%を超えている。2005年と比較すると、B以上の評価の割合はほぼ同じだが、B評価が減りA評価のクラスが増えている。

「教材提示(6)」についてはC以下のクラスが30%あり、学生の評価はさらに厳しいものとなった。近年の傾向として効果的な教材提示方法を求めて、教員がパワーポイントや映像機器等を用いる傾向が強い。実際、この分野のハードの進歩はめざましい。しかし、アンケート結果は、このような機材の使用が必ずしも高評価につながるわけではないことを示唆しているといえよう。現在の学生は最新の機材を使った授業のものには慣れており、教材を使用すること自体を評価することは少ないのかもしれない。授業の内容や教室環境に合わせて、映像機器機材を適切に使い分けことが、教員にますます求められていると感じる。

「取り組み(11)」は約47%のクラスがC以下になっており、評価の低さは顕著である。しかし、C以下の数字が2005年から3%近く減少していることは重要である。2005年は2004年から5%近く減少していることを合わせて考えれば、C以下のクラスはこの2年間で約8%減少している。本学の学生数を考えれば、この数字は意義深いものといえよう。

以上の結果を総合的に考察すると、2006年のアン

ケート調査結果は一見すると2005年から大きな変化はないように思えるが、質問項目ごとに詳細に分析すると、教員の授業改善のための努力がより多くの学生に認められているといえよう。B以上の評価の割合が2005年と大きく異なる項目についても、その内訳を見れば、A以上の評価が増加している項目が多い。

このような教員の努力は、「取り組み(11)」の評価が地道だが着実に上昇していることに反映されていると思われる。

今後は、「教材提示(6)」のような比較的评价の厳しい項目を重点的に改善することが、質のより高い授業を提供することにつながるだろう。

表3：担当教員の所属ごとのクラス評価平均の標準値3.0からのずれ

	法	文	経	商	社	工	情	外	全平均
1. 授業内容は、講義要項、授業計画等で示したものに沿った内容でしたか。	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○	○○○	○○○	4.0
2. 授業内容について、わかりやすくする工夫がなされていましたか。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	3.7
3. 担任者の解説の声は、はっきりと聞き取れましたか。	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○	○○○	○○○	4.0
4. 学生の理解を深めよう、能力を高めようとの熱意・努力が感じられましたか。	○○	○○○	○○	○○○	○○○	○○	○○	○○○	3.9
5. 教科書・配付資料の利用は適切でしたか	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.8
6. 黒板の使い方やOHP・ビデオ、パソコンなどの機器による教材の提示の仕方は適切でしたか。	○	○○	○○	○○	○○	○	○○	○○	3.6
7. 担任者は、学生からの質問に的確に対応しましたか。	○○	○○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.8
8. 全体としてこの授業を受講して満足しましたか。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	3.7
9. この授業を通じて、知識が深まった、能力が高まったと感じますか。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	3.7
10. あなたはこの授業によく出席しましたか。	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	4.4
11. あなたは予習・復習するなど、この授業に意欲的に取り組みましたか。	○	○	○	○	○	○	○	○○	3.3
12. この授業の教室の広さ、座席の形態などの教室環境は適切でしたか。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.8
1～12の全体平均	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.8

ここでの所属は、授業を担当する専任教員の所属と非常勤講師などの推薦母体となった学部・外国語（教養科目・保健体育科目・教職専門教育科目だけの担当者は文学部）である。クラス評価平均値の標準値3.0からのずれを0.4きざみに図表化したもので、○1つにつき1段階上がり、▼1つにつき1段階下がる。

■ 2005年度春学期調査（第10回調査）結果より○が増えたことを表している。
 ■ 2005年度春学期調査（第10回調査）結果より○が増えたことを表している。

3. 担当教員の所属別状況

表3は、質問1から質問12までの項目に対して、各学部におけるクラス評価平均値を標準値3.0の差を学部ごとに示したものである。

項目(1)～(7)は、大まかに言って、授業スキルに関するものである。全ての質問について、どの学部でも標準値より高い評価を得ていることがわかる。2005年と比較すると、「要項(1)」と「熱意(4)」がそれぞれ0.1上昇し、全体的に上昇傾向が見られる。

学部をみると、法学部が2項目、外国語機構が1項目で評価を下げているものの、商学部、社会学部、総合情報学部がそれぞれ1項目で評価を上げている。そのためもあり、全般的に外国語機構と文学部の評価が高いものの、工学部を除いた他の学部との間に大きな差はないといえよう。

項目(8)と(9)の結果からは、学生が授業内容そのものをどう評価したかを知ることができる。これらの項目は標準値よりも十分に高い数値を示しているが、授業スキルに比べると相対的に低くなっている。この2項目については、全ての学部が同じ評価を得ていることも興味深い。

項目(10)と(11)は出席や学習意欲に関する項目である。「出席(10)」に関しては上述の通り全学部において非常に高い評価が与えられている。ところが、授業によく

出席する学生であっても「取り組み(11)」の評価は依然として低い数字に留まっている。この中で2003年春学期から2005年秋学期まで継続して標準値3.0を下回った社会学部が、今回、標準値に達したことは注目されるべきであろう。

最後の項目(12)は教室環境に関する質問である。2006年は2005年と同じ評価を示した。全学部で同じ評価であったことも2005年と変わらない。

今回の結果を総合すると、1～12の全体平均では、2005年の3.5から3.8へと上昇している。評価が比較的大きく向上したといえるだろう。学部間で比較すると、総じて外国語機構の評価が高く、文学部、商学部、社会学部がそれに続いている。反対に評価が低かったのは工学部で、「出席(10)」を除いて、○3つの評価項目はなかった。

今回の調査でも、全ての学部において「出席(10)」の評価の高さと「取り組み(11)」の低さの違いが目立つ結果となった。授業によく出席する「勤勉な学生」を、自主的に予習・復習に取り組む「自立した学習者」へと変容させるには何をすべきなのかを、教員は今後とも模索し議論していかなければならないだろう。

(商学部教授)